

最終電車

大塚 喜子

長かったコロナ災害等が終息して、世間は賑わいを取り戻しているようだ。俺は何時ものように残業を終えて、新宿二十三時二十分発の小田急電車の先頭車両に乗った。次の駅から乗車した初老の男が、直立不動で多くも乗客に向かって、語りかけた。

「皆さん、私は十六年間刑務所に入っていました。昨日出所して、まだ誰とも話をしていません。怖くて話せないのです。話が出来ないと仕事してもらえませんので、皆さんへのご迷惑を顧みず、勇気を奮い起こして口を開いたようなわけです」

「うるせい、ボケ、ひっこめ！」とヤジを飛ばす仲間を、金髪少年が鋭い目つきで押さえた。彼がリーダーらしい。俺を含め乗客は無言でこの男を見守った。

「お疲れのところ、本当にすいません。話せて少し楽になりました。明日、ハローワークに行ってみます。でも仕事なんか無いかも知れませんね……」最後は消え入りそうな声だった。

「ない、ない」再びヤジが飛んだ。乗客の非難の目が、ヤジった若者に集中した。男は一瞬、怯んだが、続けた。

「長年迷惑をかけた家族に会いに行けるように、親父に安心してもらえるように、懸命に働きます。くだらない話を聞いて下さって、本当にありがとうございました」

男が深々と頭を下げると、先ほどの金髪が立ちあがって拍手した。伝播して、乗客の何人かも拍手した。男は何度も、何度も三分刈りの白髪交じりの頭を下げた。

俺は犯罪者ではないが、故郷の出雲に何年も帰っていない。警察官だった親父が退職金を前借りして、東京の私立大学に行かせてくれた。なのに、俺は勉強がカラキシ好きになれなかった。何とかなるだろうと思いつながらの都会暮らしは、アツという間に終わった。

「就職氷河期だ。仕方ない」と親父は言ってくれるが、俺は未だに非正規雇用で働いている。俺は経堂駅で「頑張れよ」と男の肩を叩いて、下車した。

出雲に帰ってみようか？親父に会いたい。